堺市教育委員会

堺がめざす「新たな学校のあり方」

～新たな学校マネジメントモデル事業を通して～

はじめに

Society5.0 時代や人生 100 年時代の到来、グローバル化の進展、人口減少の進行など、これからの子どもたちは VUCA（予測困難で不確実、複雑で曖昧）の時代を生きていかなければならないと言われています。OECD Education2030 では、2030 年に子どもたちに求められる力として「新たな価値を創造する力」や「対立やジレンマに対処する力」、「責任ある行動をとる力」が示されており、VUCA の時代を生きる子どもたちに必要な力を育むため、学校教育のあり方も時代に応じて変化させていくことが求められています。本市では、「新たな学校のあり方」について議論を始め、新たな学びをめざすための学校の変革を推進する取組を進めています。

1. 堺市の概要

本市は、大阪府の中南部に位置する政令指定都市で、人口は約 81 万人（令和 6 年 2 月 1 日現在）、仁徳天皇陵古墳をはじめとする世界遺産「百舌鳥･古市古墳群」や、中世の自由・自治都市の往時の趣を残す環濠エリア、千利休により大成された茶の湯文化、刃物・線香・自転車等の伝統産業といった豊かな歴史文化資源を有しており、中世から近代にかけては「ものの始まりなんでも堺」と言われたようにイノベーションを生み出してきた都市です。

市立の学校園については、小学校 92 校、中学校 43 校（施設一体型小中一貫校 2 校を含む）、特別支援学校 3 校（分校含む）、高等学校 1 校、幼稚園 4 園を所管しており、「ひとづくり・まなび・ゆめ」を教育理念として定め、めざす子ども像である「それぞれの世界へはばたく“堺っ子”」の育成に向けて、様々な施策を通じてその実現をめざしています。

2. 堺がめざす「新たな学校のあり方」

（1）基本的な方向性の議論

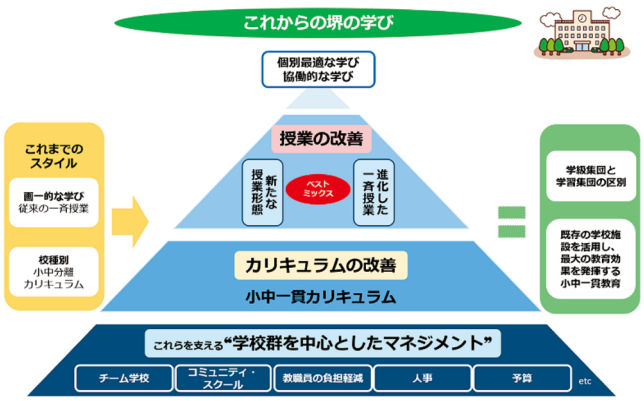
本市では、令和 3 年度から総合教育会議において、現在の教育の課題や国の動向を踏まえた「新たな学校のあり方」について議論してきました。

※総合教育会議での議論の内容については「総合教育会議」のページからご覧になれます。

詳しくはこちら→

総合教育会議では、子どもたちが生きる時代が変わるなら、当然、教育も変わらなければならず、学校教育が抱える様々な課題に対して短期的に個々に対応していくだけでなく、中期的かつ総合的に学校の変革を推進し、自主性・自律性に富んだ自立した学校により子どもたちへの学びを変えていく必要がある。急激に変化する時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育み、子どもたちの可能性を最大限に引き出すため、これからの学校教育でめざす学びを「令和の日本型学校教育」である「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と位置づけ、これまでの画一的な授業から脱却し、「新たな授業形態」と「進化した一斉授業」のベストミックスを図る「授業の改善」や、系統性と連続性を意識した小中一貫体制による「カリキュラムの改善」を進める。さらに、それらの改善を学校ごとに個別に進めるのではなく、中学校区の小中学校を「学校群」として捉え、学校群の教職員、施設、予算のスケール

メリットを生かした「学校群を中心としたマネジメント」を発揮することで、学校の主体的な創意工夫ある効果的な取組を推進していく。「新たな学校のあり方」は、具体的な制度設計を経て、令和７年度から実施することが、会議に参加している市長、教育長、教育委員で共有されました。



（令和３年度第３回総合教育会議から一部抜粋）

図１：これからの堺の学び

（2）新たな学校マネジメントモデル事業の実施

① モデル学校群の概要

令和７年度からの「新たな学校のあり方」の実施に向けて、各種制度の見直しの必要性や、効果的な組織体制、取組の進め方などを検討するためのモデル校を募集し、５つの中学校区をモデル学校群と決定し、令和５年度から各モデル学校群で異なる課題や特性に応じた取組を進めています。

令和６年度からは、新たに３つのモデル学校群を追加し、８つのモデル学校群で取組を実施、検証します。

開始年度	学校群（中学校区）	構成する学校
令和5年度～	陵西学校群	陵西中学校、少林寺小学校、安井小学校、大仙西小学校
	旭学校群	旭中学校、神石小学校、大仙小学校
	若松台学校群	若松台中学校、上神谷小学校、若松台小学校、茶山台小学校
	三原台学校群	三原台中学校、三原台小学校、泉北高倉小学校
	五箇荘学校群	五箇荘中学校、五箇荘小学校、五箇荘東小学校、新浅香山小学校
令和6年度～	月州学校群	月州中学校、三宝小学校、錦西小学校、市小学校
	八田荘学校群	八田荘中学校、八田荘小学校、八田荘西小学校
	赤坂台学校群	赤坂台中学校、赤坂台小学校、新檜尾台小学校

（令和５年度第３回総合教育会議から一部抜粋）

表２：モデル学校群一覧

② モデル学校群の取組検討体制の構築

各モデル学校群では、まずはじめに校長、教頭、主幹教諭等が中心となり、学校群に共通する課題を出し合い、地域の特性などを踏まえて、小中学校９年間で育成したい子どもの姿として「学校群教育目標」を設定しました。

学校群名	学校群教育目標
陵西	ちがいを認め、ともに生き、将来の夢と希望に向けて自ら学び続ける子
旭	自ら課題をみつけ、仲間とともに、未来を創り出す子
若松台	自己を高めようと努力し、自ら学び続ける子
三原台	人権意識を高く持ち、特別支援教育を通して、自己肯定感や他者への思いやりのある子
五箇荘	自ら学びに向かい、自ら取り組み、自ら表現できる子

表３：令和５年度から実施している各モデル学校群の学校群教育目標一覧

各モデル学校群では、学校群の方針等を決定する校長、教頭、主幹教諭等で構成する代表者会や、校務分掌や教科等ごとに専門部会を設置するなど、各モデル学校群の状況に応じた学校群推進組織を立ち上げ、小中学校の教職員が協働して、学校群教育目標を実現するための取組を検討・実施しています。

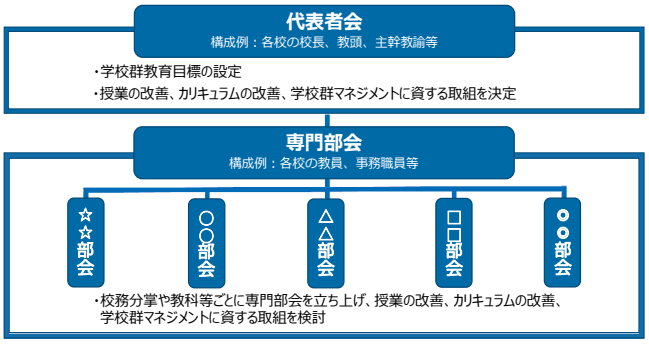


図４：学校群推進組織の一例

写真５：モデル学校群代表者会

③ モデル学校群の取組

各モデル学校群では、特色ある様々な取組が教職員の発意で実施されています。その取組の一部を紹介します。

（ア） 学校群内の小学校が共同で取り組む単元内自由進度学習（五箇荘学校群）

授業改善の取組として、学校群内３つの小学校の６年生を対象に、算数「比」の単元において、子どもが「学習計画表」を活用して、教科書、プリント、ドリルパーク（AI型端末教材）、自由課題等の多様な選択肢の中から自分にあった学習方法を選択し、自分のペースで学習に取り組む「単元内自由進度学習」による授業を実施しました。

図６:学習計画表
学び方の順番やどのような教材を使って学習するかなど、自ら選んで学べるように学習計画表を作成しました。

写真７:自由課題
色水を使った発展学習コーナーの様子です。子どもたちは、単元で学んだことを活用して自由課題に挑戦しました。

（イ） 学校群の教職員がともに学ぶ合同研修（三原台学校群）

小中学校の９年間で子どもたちに系統性のある学習指導を行うため、これまで各校で行っていた研修を学校群合同研修とし、年間を通して小中学校３校の教職員で学び合う場を設けました。特別支援教育の視点に基づいた授業改善を進めるため、学校群内すべての教職員がUD（ユニバーサルデザイン）の視点を取り入れた授業を行うための研究授業を実施しました。教職員同士が相互に相談・連携し合える関係を築くことで、小小・小中のつながりを強固なものにし、子どもが安心して９年間を過ごせる体制づくりを進めています。

写真８:研究授業
学校群内の教職員約70人を低・中・高学年の３つのグループに分け、授業の研究を行いました。

写真９:事後検討会
学校群で育成したい子どもの姿の実現に向けてUDの視点を取り入れた授業の重要性や、各教科の９年間の系統性を意識した授業のあり方等について議論しました。

（ウ） 小学校連合運動会の合同練習（若松台学校群）

若松台学校群では、すべての市立小学校の６年生が一堂に会し各競技を行う小学校連合運動会に向けて、学校群内３つの小学校の６年生が中学校の運動場に集まって合同練習を行いました。３つの小学校は児童数・教職員数が少ない小規模校のため、単体の学校では各競技に分かれての練習や綱引きの練習を十分に行うことが難しいですが、学校群で一緒に練習を行うことによって、学校群内の同級生と一緒に種目別の練習を行うことができました。最後は、３校の児童代表がエール交換を行い、競技会場での再会と本番での健闘を誓い合いました。指導体制についても、各小学校の教員と中学校の体育科教員が協働し、きめ細かな指導を行いました。

写真10:綱引きの練習
各校対抗の練習試合を行い、子どもたちは本番さながらの白熱したムードで試合に臨みました。

写真11:種目別練習
各校混合で100m走や走り幅跳びなどの種目別練習を行い、学校を越えた仲間たちと練習に励みました。

（エ） オンラインと対面を組み合わせた小小合同授業（陵西学校群、旭学校群）

陵西学校群では、G7大阪・堺貿易大臣会合の開催をきっかけに、「子どもサミット～G7から世界への興味・関心を広げよう～」と題した学校群内小学校合同の国際理解教育を実施しました。各校でG7参加国について調べた内容をオンラインや対面で発表し合いました。

写真12:オンラインを活用した合同遠隔授業
G7参加国について調べた内容を他校の仲間に発表しました。

写真13:対面による合同授業
グループに分かれ、ゲストティーチャーの方にG7参加国について質問しています。

旭学校群では総合的な学習の時間において、自分の住んでいる地域や世界の国々について調べた内容を、学校群の他校の仲間に発表しました。オンラインと対面の良いところを活用して工夫をこらした合同授業を実施しました。

写真 14：オンラインを活用した合同遠隔授業
大仙小学校の子どもたちは、大型テレビで神石小学校の子どもたちの発表を見ながら、自分の PC 端末にチャット形式で感想を書き込みました。

写真 15：対面による合同授業
大仙小学校の子どもたちは、クイズを取り入れた劇形式で発表を行い、神石小学校の子どもたちも参加できるように工夫しました。

これらの取組によって、様々な効果が表れてきています。例えば、学校群推進組織の設置では、学校群の小中学校の教職員でアイデアを出し合う場ができたことで、校種を越えて教職員の風通しが一層良くなっています。（ア）や（イ）の取組では、子どもたちの学びの変革だけでなく、教材・教具等の授業準備や校内研修などの校務分掌を学校群の小中学校の教員が分担して行うことで、教員の負担軽減につながっています。（ウ）や（エ）の取組では、単学級のため、子どもの人間関係の固定化等の課題がある小規模校が学校群内の小学校の同学年の子どもと合同授業や合同体験学習を実施することで、同学年の子どもの多様な考えに触れる機会が創出できました。また、適宜、小学校の授業に中学校の教員も加わることで、小学校の子どもと中学校の教員との交流の機会ができ、中学進級の円滑なつなぎが期待できます。

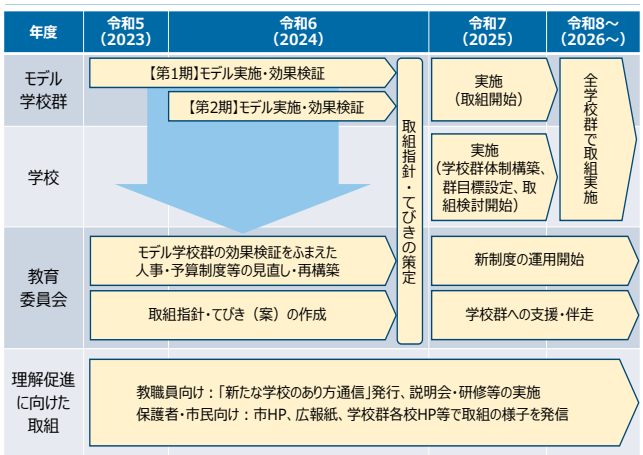
今後、これらモデル学校群での取組の一つひとつは、検討プロセスや効果、課題等を検証し、すべての学校で共有化できるように事例集として取りまとめる予定です。

※各モデル学校群での取組については堺市 HP からご覧になれます。

詳しくはこちら→

（3）今後のスケジュール

令和 7 年度は、すべての中学校区が学校群として学校群推進組織の構築や、学校群教育目標の設定、取組の検討等を開始することとしています。教育委員会事務局では、各学校群が自主的・自律的に学校運営ができるように学校の裁量権限拡大に向けた人事や予算制度の見直しも検討しており、今後、「新たな学校のあり方」の基本的な方針となる取組指針や、授業改善やカリキュラム改善等のてびき、モデル学校群での取組事例集を作成する予定です。

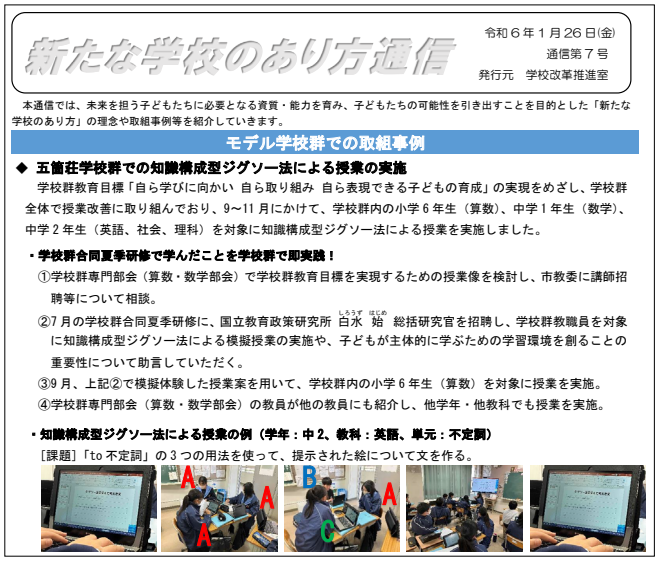


（令和 5 年度第 3 回総合教育会議から一部抜粋）

図 16：今後のスケジュール

今後、全校で実施していくうえでポイントとなるのは、実際に学校現場で子どもたちへの学びを担っている教職員の意識変革だと考えています。教職員が、総合教育会議で示された個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた授業改善や、系統性、連続性を意識したカリキュラム改善、その他各学校群の課題に応じた取組を学校群という組織体制の中で小中学校 9 年間を見通しながら実施していくことの必要性や重要性を理解して取り組んでいけるかが、本市の学校変革の鍵を握っていると考えています。そこで、全校実施前の時点からすべての教職員に向けて「新たな学校のあり方」の目的や取組の方向性、モデル学校群での取組事例などを紹介する「新たな学校のあり方通信」を 2 週間に 1 回の頻度で発行しています。また、教育委員会事務局において、校長マネジメント、教職員の資質向上などの研

修制度や、授業やカリキュラム改善、予算や人事制度など、学校運営に関わる様々な制度、仕組みを「新たな学校のあり方」の視点で点検、見直しを図っています。



新たな学校のあり方通信

令和６年１月26日(金)
通信第７号
発行元　学校改革推進室

本通信では、未来を担う子どもたちに必要となる資質・能力を育み、子どもたちの可能性を引き出すことを目的とした「新たな学校のあり方」の理念や取組事例等を紹介していきます。

モデル学校群での取組事例

◆ 五箇荘学校群での知識構成型ジグソー法による授業の実施

学校群教育目標「自ら学びに向かい 自ら取り組み 自ら表現できる子どもの育成」の実現をめざし、学校群全体で授業改善に取り組んでおり、9～11 月にかけて、学校群内の小学６年生（算数）、中学１年生（数学）、中学２年生（英語、社会、理科）を対象に知識構成型ジグソー法による授業を実施しました。

・学校群合同夏季研修で学んだことを学校群で即実践！

①学校群専門部会（算数・数学部会）で学校群教育目標を実現するための授業像を検討し、市教委に講師招聘等について相談。

②7 月の学校群合同夏季研修に、国立教育政策研究所 白水 始（しろうず はじめ） 総括研究官を招聘し、学校群教職員を対象に知識構成型ジグソー法による模擬授業の実施や、子どもが主体的に学ぶための学習環境を創ることの重要性について助言していただく。

③9 月、上記②で模擬体験した授業案を用いて、学校群内の小学６年生（算数）を対象に授業を実施。

④学校群専門部会（算数・数学部会）の教員が他の教員にも紹介し、他学年・他教科でも授業を実施。

・知識構成型ジグソー法による授業の例（学年：中２、教科：英語、単元：不定詞）

［課題］「to 不定詞」の３つの用法を使って、提示された絵について文を作る。

図 17：「新たな学校のあり方通信第７号」一部抜粋

おわりに

令和５年 12 月に国立社会保障・人口問題研究所から将来推計人口が公表されました。本市の０歳から 14 歳の将来推計人口は、2030 年時点で、2020 年と比較して 22%減少すると推計されており、政令指定都市の中で最も早く少子化が進みます。令和５年５月１日現在、本市小学校 92 校のうち 29 校（約 32%）が通常学級 11 学級以下の小規模校で、今後ますます学校の小規模化が進むことが予想されます。

また、これまでの教育現場は旧３K（経験・勘・気合い）に支えられてきましたが、今後は新３K（可視化・共有化・効率化）で支えるべきだと言われています。プロ野球のトレーニング棟には最新鋭機器をそろえた動作解析室を設置し、ハイスピードカメラやモーションキャプチャーなどの高性能カメラで選手を撮影し、より緻密なデータを蓄積することができるようになりました。教育現場においても、どのようなデータが必要で、それを集めるためにどうすれば良いのか、トライアンドエラーを繰り返していく必要があります。

教職員の資質能力を学校単位から学校群という大きな規模で捉え、スケールメリットを生かして最大限に活用しながら、教育データの利活用も融合させ、創意工夫あふれる効果的な教育活動が展開されるよう、学校の変革を進めていきます。